



京都造形芸術大学 学長
尾池 和夫

おいけ・かずお氏

1940年生まれ
1963年 京都大学理学部地球物理学科卒業
1972年 理学博士
1973年 京都大学防災研究所助教授
1988年 京都大学理学部教授
2001年 京都大学副学長
2003年より2008年まで 第24代京都大学総長
2009年 国際高等研究所所長
2013年4月 京都造形芸術大学学長に就任
日本文藝家協会会員、俳人協会評議員、氷室俳句会副主宰

芸術の創造力で社会の変革を目指す

国立大学で地球の研究に没頭するなどして50年の時を過ごし、今年4月、思いもよらず私立大学長の任を賜りました。しかも芸術大学。見るもの聞くもの全て新鮮、全て興味深く感じます。まずは科学者らしく、ひたすら観察し、考え、分析することに徹しています。

本学人間館1階に置かれた新しい黒御影石に、本学の基本理念が美しく刻まれています。『宇宙の神秘に平伏せ、地球の偉大さに畏れを抱け、生きとし生ける命を愛し尊べ』を意識しつつ芸術活動を行い、そのとどまることのない研鑽が、人類の未来を希望あるものへと導くという、理念に共感し、私も地球科学者の立場からお手伝いしようとこの職に就きました。

即ち私の役割は、ともすれば狭い視野で芸術を捉えがちな人々に対し、地球とは何か、人類とは何か、芸術とは何かと問いかけ、揺さぶること。科学者の知り合いなどにも積極的に協力を依頼していきます。

科学者の視点で「問い」を投げかける

サプライズゲストの第1弾は、京都大学霊長類研究所にいるチンパンジーのアイでした。私の学長就任祝いとして、彼女から絵をプレゼントしてもらいました。それを本学の展示会に出品し、さらにアイが絵を描く場面を動画に収め公開しました。道具を使って、ひたすら楽しそうに色を塗るアイ。絵画は人間特有の行為という人もいますが、実は違うのです。芸術とは、絵を描くとはいったい何なのか？ 学生が改めて考える機会になったのではないかと思います。

次の企画として、花折断層沿いを学生と共に散策することを考えています。京都盆地は約100万年前から始まったいくつもの活断層運動により形成されました。本学瓜生山キャンパスは花折断層(南部)の上盤に建ち、隆起運動による景観も十分に活用しています。この断層沿いを何kmか学生と歩き、地盤のずれが何をもたらしただか、地球のエネルギーとはいかなるもの

かを見て、感じてもらいたいと思っています。

私はこれまでの仕事において、「3現則」を大切にしてきました。「現象」をしっかりと見ること、「現場」に行ってみること、「現在」の姿を見ること。学生に対してもこれらを推奨したいと思いますが、本学の大きな特色である「プロジェクト学習」も、発想は共通します。学内に映画スタジオや工房など制作現場を作って各界最前線のクリエイターに師事する機会を創出したり、新商品のデザイン開発や百貨店のウィンドウディスプレイなど産学連携プロジェクトも年間約40件を受託。500人を超える学生が参加しています。リアルワークによるキャリア教育といえますが、こうした学びに積極的に関わって、社会へ出る弾みをつけてもらえたらよいと思っています。

基礎的な教養科目が数多くあり、それらにしっかり取り組むところも本学の学びの素晴らしさです。ただし、数年前よりその実質化を課題と捉え、全学的なカリキュラム改革を進めようとしていることも事実です。就職につながるような基礎力が確実に身につくカリキュラムを整え、その基盤の上に芸術作品づくりのための学びを設定する。来年度にスタートさせるべく教職員が取り組んでおり、私も大いに支援しています。

本学のひとつの良き伝統は、教職員に一体感があるところです。教員が決めて職員が実行するという大学は比較的多いと思いますが、本学は違います。全体の教授会がなく、2週に1回程度開かれる「代表教授会」や「学長会」で日常の教学について決定していきます。私のほか学部長、研究科長、事務局長、職員ら20人程度が出席し、主に職員が率先して考えたアイデアを次々に発表し、参加者みんなで議論し、決めていくのが通常の流れ。そこで決議されたものはすぐ実行に移していきますから、非常にスピーディです。

教員と職員との間に壁はなく、とりわけフットワークの良い職員達がこの組織を活性化してくれており、

とてもありがたく思っております。

伝統を守り、地道に続けることが重要

学長となり、いきなり何かを変えようなどと、おこがましいことは考えていません。早く成果を出す見返りに大きな予算のつくような仕組みが世の中にはありますが、ああいうもので本当の成果を上げることは難しいのではないのでしょうか。そこに集中すれば他がおろそかになり、そう簡単ではないと思います。

結局のところ、そういうノイズに惑わされず、昔からの伝統を大切にしていっていき、地道にやっていると残るのではないのでしょうか。京都には独自の技術を守り、磨き上げる努力を続け、国際的に高い評価を得ているものづくりの会社がいくつもありますが、見習うべきはその姿勢でしょう。

今は「多様化の時代」だと思います。学生一人ひとりの違いを認識し、一人ひとりをケアできる教育体制を敷く必要があります。教育とは本来、個々のニーズに応えるものだとするれば、それが初めて実現できる世の中になっていくのかもしれない。

そういう時代に私が学長としてすべきことは、やはり学生が何を望んでいるかを日々観察したり、話を聴くことでしょう。すでに学生を招待し、「朝食会」を数回実施しました。そのなかで教育や設備の要望など、多くの意見が出ました。実りある改善案には、大学として直ちにアクションを起こしています。

本学は創立以来、大いなる発展を続けてきたと自負していますが、まだまだ成長の余地はあると思います。私個人としては、新たに創りたい学部があり、その可能性を追求していきたいと考えています。そのように各々が可能性を追求できる大学であり続けたい。

これからも芸術の力を信じる仲間が集い、芸術創造のエネルギーが満ちあふれる大学として存在できるよう、教職員一丸となって盛り立ててゆく所存です。 